

【編集人】東日本旅客鉄道株式会社 広報部長 佐藤 勉
 【企画・編集/広報部】電話03-5334-1292
 〒151-8578 東京都渋谷区代々木2-2-2
 ホームページ http://www.jreast.co.jp/
 【編集・制作】株式会社ケイオフェイス
 【アートディレクション】株式会社坂川事務所
 【発行人】大石 壽一
 【発行所】株式会社ジェイアール東日本企画
 〒150-8508 東京都渋谷区恵比寿南1-5-5 JR恵比寿ビル
 定価100円(本体価格96円)

岩城人形店

山形県山形市木の実町11-10 電話023-622-6346

青と緑だと合わないから、茶色は朝焼けの色。今にも飛び掛かってきそうな「ねまり虎」や、月山の神の使いの兎を形どった「月山玉兎」は、山形独特のデザインで、人気がある。岩城さんは、思いついたときにスケッチをし、伝統のモチーフに自己流のデザインを加えて作品をつくることもある。



山形張子は、山形県の伝統工芸品として、世界各国に輸出もされている。「アメリカでは天狗面が人気で売れました。どうしてこんなに売れるのかと思ったら、玄關に飾って、帽子掛かして使っていたんです」。



「JR EAST」では、これからも、より読みやすく、みなさまのお役に立つようなグレードの高い情報をお届けしたいと思っています。今後、さらに誌面の充実をはかるため、本誌へのご意見・ご感想などをJR東日本広報部までお寄せください。お待ちしております。

社外からの寄稿やインタビューなどにおける発言は、必ずしも当社の見解を表明しているわけではありません。

【写真協力】amanaイメージズ、関PPS通信社

本誌は再生紙を使用しています。なお、「JR EAST」の定期購読のお申し込みは、株ジェイアール東日本企画(☎03-5447-7856)までお問い合わせください。

伝統の技で 魂を吹き込む

和紙、ふのり、胡粉(こばん)の貝殻、筆、絵の具などが、所狭しと並べられている。岩城さんの作品はすべて、ここから生まれる。使い込まれた黒光りしている木型は、先代から伝わるものも含めて、約五百個あるという。木型に油を塗り、ちぎった和紙を水張り

「暁の竜」といいます。まりに乗って遊んでいる子供の兎「玉乗兎」が、今年の年賀切手のデザインに選ばれた。全国から注文が殺到しているが、昔ながらの手仕事のため、一日に三つしかできない。「お正月に夢を見たんです。兎が出てきて、あなたがつくってくれないと、私は世の中に出られません。十二年に一回しか出られないのだから、どうか約束してください」といわれた。私は七百羽つくると約束しました。だから今年一年は大丈夫。兎が私の命を保証してくれたんです」

「私がつくるのを見習って一年ぐらいになる。今では、自分で一通りつくりますよ」と、穏やかな表情を見せる。岩城さんは「伝統を發展させないと、国も町も發展しない」と語る。山形張子一筋に歩んで六十五年。熟練の技と職人魂が、伝統に命を吹き込む。



匠の肖像

第29回

山形県山形市
岩城久太郎
 Photographer: Kōji Arimitsu

山形張子



かぐや姫や舌きり雀、七福神、天狗、おかめ、ひよっとこ……。民話や十二支をモチーフにした郷土玩具の「山形張子」は、手作りの温かみがあり、味わい深い。

幕末安政のころ、京都の士、渋江長四郎が和紙の生産地・山形に土着し、京都嵯峨人形の手法によってつくったのが「山形張子」の始まりである。

「山形張子」が最も売れたのは、昭和二十年代後半だという。戦後、おもちゃのない時代に、親たちが子供にせがまれて張子を買って与えた。

「毎年お盆には、張子のお面をかぶり、お墓の陰から飛び出したりして、遊んだものです」岩城久太郎さんは、今では「山形張子」を伝える、ただ一人の職人である。父親の徳次郎さんが渋江家に弟子入りして技術を習得。幼いころから父親の仕事を見てきた岩城さんが、七代目を継いだ。

「うちの親父には、見て覚えろといわれました。一年経てば一通り覚えるけれど、一人前になるには十年かかりますね」

八畳の仕事場には、作業台を囲んで、木型